

内海 健, 津川律子 [著]

援助者必携

心理カウンセリングのための精神病理学入門

四六判並製・金剛出版

2025年2月刊

定価3,740円（税込）

評者＝安藤 徹（香椎療養所）



本書は精神病理学者の内海が、ベテラン心理職の津川を聞き役として、診断や症状、代表的な疾患とその症状などについて12回に分けて語っていく。著名な二人の対談であるが、津川が内海へ心理職の留意するポイントを丁寧に確認している。

臨床では時間をかけて患者と関係を作り、その中で症状や言動の意味が明らかになったり、少しずつ変化していったりすることが多い。しかし関係性や時間経過から感じられるものは不確かで曖昧であり、言語化に四苦八苦する。評者の場合、SVでの指摘や同僚との雑談でまとまったり実感できたりすることも多いのだが、専門家としてももう少し正確につかんだり言語化できたりしないかと悩むことが多かった。しかし内海も（理解の解像度の違いは大きそうだが）似た体験を開示していて驚き、他の心理職も似た感覚をもっているのかもしれないとも考えた。内海は雑談など内輪での事例検討をさらっと推奨し、（冗談半分かもしれないが）津川へ半分は「話し相手」となることを条件に勤務のオファーを出したことも明かす。症状は「関係性のネットワークの中で析出するもの」と語られるが、症状や患者の理解のために治療者自身も周りのネットワークに支えられてよいし、むしろその中で見つかるものが臨床で大切なものなのだろうと感じた。

ところで内海はDSMを「現代のアメリカ社会において、ビジネスで成功する人物像の陰画になっている」とも指摘する。患者の生きづらさを社会構造からも理解しようと促していることは本書の重要な視点のひとつだろう。評者自身、患者へマイクロアグレッションを向けていたことに後で気づくことがある。患者だけでなく治療者も含めて、私たちが置かれている社会構造への視座は臨床において欠かせない。臨床家自身の特権性や視点の偏りも前提に「患者との対話に開かれている」ことが重要なだろう。

もちろん、臨床家として基本的な知識や理解は前提

として必要である。本書では気分障害、統合失調症、発達障害（ASDとADHD）の代表的な症状や病理について、理解や援助の道標となるものが芸術や古典、臨床エピソードと共に豊かに語られる。症状や病理が対談形式でかみ砕かれて説明され、心理職以外の対人援助職も読みやすいだろう。初学者の時に傍にあれば心強かっただろうと思った。

二人の対談から日々の患者の姿が自然と想起され、患者ともっと話し合いたくなったし、取り上げられなかった症状を考えなくなった。本書では議論のポイントが絞られており、それぞれの複雑な臨床現場では「析出」できず迷うだろうと思う。だからこそ、やはり「入門」なのだろう。対談に刺激され、終始さまざま考えが浮かび、気づくと頭の中が装丁のメビウスの輪のような状態となっていて、同僚と雑談したくなった。初学者だけでなく、同僚や中堅以上の心理職にも勧めたいし、そうすることで雑談相手も増えるのではないかな、そんな期待も抱かせてくれた。